

小津安二郎と河合武夫

——サンパウロの『浮草』

ブラジルの日系人社会で上映された、はじめての邦画は『日蓮上人一代記』（一九一八年日活）と『赤垣源蔵』（一九二四年日活）であった。一九二六年八月五日、熊本県海外協会によってサンパウロの中山旅館で試写された。小津安二郎の作品は、南米興行によって一九五一年四月二七日『晩春』（一九四九年松竹）、日伯興行によって同年一〇月二九日『宗方姉妹』（一九五〇年新東宝）が上映されている。『晩春』のポルトガル語訳は、広津和郎の原作『父と娘』と同じ意味の《OPALÉ FILHA》であった。主演原節子のセリフに新鮮な現代日本語を感じたという映画評がブラジルの邦字紙に掲載された。細川周平氏は「このように脚本や映像ではなく、セリフの発音の現代性を『晩春』に見いだしたという批評は、たぶん日本国内ではなかったろう」と指摘する。そして「七〇年代には日本語が聞けるというのが、一世にとつての日本映画の大きな楽しみになった。台詞回しではなく、日本語の音そのものに反応するのは移民文化の特徴だろう」という¹⁾。

輝く女性が出演する小津作品に魅了された日本人移民の一人

尾西康充

に、河合武夫がいた。まず河合の経歴を振り返っておこう。河合は一九〇六年四月三〇日多気郡多気町五桂の河合武八の三男として生まれる。河合の実家は河武醸造を営む素封家であった。一九二五年八月二〇日第五三回ブラジル移民船「しかご丸」にてサントス港に着いた。同船していた移民監督古関徳弥に兄事することになる。古関の兄富弥に紹介され、ノロエステ線パウルーのサン・ルイス耕地にある邸宅直属の果樹菜園で働くことになった。だが同地を一カ月で飛び出し、サンパウロ市に出て聖州義塾に入った。聖州義塾とは、小林美登利によってサンパウロ市にはじめて創設された、寄宿舎が併設された日系人教育機関であった。小林は同志社大学を卒業していたが、プロテスタント長老派教会系のマッケンジー大学に入学し、キリスト教会を通じて人脈を広げていた。²⁾河合もマッケンジー工科大学土木科を卒業——日系人最初の工学学士であった。一九三三年末に一時帰国、大阪大学で統計学を聴講するが、一九三七年「さんとす丸」の移民輸送助監督として再渡伯。ブラジル拓殖組合に入社、ピリアニット植民地の測量を担当した。翌三八年

東山企業鉱山部に入社、アビアイ鉱山副長として鉱山開発事業に従事した。古閑徳弥夫妻の媒酌によつて、チエテ移住地の齋藤真平の二女すま子と結婚。四一年一月太平洋戦争が勃発すると東山企業を失職する。四三年コチア産業組合に土建技師として就職、工事責任技師を経て施設企画室長、理事会補佐を歴任した。下元健吉専務理事のもとでコチア産業組合の業務に二六年にわたつて従事したのである。

戦後になると、日系人社会では祖国に帰ることを夢みるのではなく、ブラジルで骨を埋める覚悟を決めるべきだという声が高まる。『日系コロニア』という言葉が使われはじめたのはこの頃であつた。日系人コミュニティの新しい自己理解を求める声にこたへるべく、四六年日系人知識層が集まつて土曜会が結成される。土曜会は六五年サンパウロ人文科学研究会に発展する。河合は安藤潔(アンドウ・ゼンパチ)、半田知雄、齋藤広志、鈴木悌一たちとともに土曜会発足時からの指導的メンバーであつた。

* *

河合武夫が三重県立宇治山田中学(現宇治山田高校)に在籍していた頃、三学年上に小津安二郎がいた。国鉄佐奈駅から乗車した河合の前には、松阪駅から通学していた小津が立ちほだかつていた。当時の様子を回想した一文を紹介してみよう。

汽車通学をしていた僕は、同じく汽車で往復する小津ら数名から生意気だといういい掛りで、列車の洗面室に呼び込まれて大分殴られたが、中学で三年もの上級生、しかも何人かに囲まれてはどうにもならぬ。

親にもたかれた覚えのない大事な面を殴られたのは余程心配した見え、ひそかに期する所あつて、海軍ナイフを手に入れてそれからいつも手放さなかつたが、幸い、その後殴られる機会もなくなつて無事にすんだ。あの時のことを思うと、今でも腹に据えかねる。中学時代たった一つの自慢になる思い出は、五年に進級した時、同級生を集めて、悪例となつているこの下級生をしぼる(殴る)ことを、一切止そうという申合わせに成功したことである。

(『中学物語』、「日伯毎日新聞」一九六二年九月四日)

河合は渡伯してからも長い間、柔道部の猛者であつた小津を恨んでいた。それほどつらい体験であつたのである。ところが一九九〇年三月、ブラジルでは日本人映画監督としてはじめてなる小津安二郎の回顧上映会が開かれることになつた。小津の代表作一一本(上映順に『生まれてはみたけれど』、『秋刀魚の味』、『一人息子』、『東京物語』、『晩春』、『麦秋』、『彼岸花』、『秋日和』、『小早川家の秋』、『お茶漬の味』、『浮草』)が三月九日から一八日までの間、サンパウロのブラジル・シネマテッカー開館一周年記念行事にて日本国際交流基金共催、日本総領事館後援で上映された。それら

一本のうち、五本にポルトガル語、六本に英語、一本にスペイン語の字幕が作成されていた。このとき井上和男監督『生きてはみたけれど・小津安二郎伝』もあわせて上映された。「日伯毎日新聞」（一九九〇年三月一五日）によれば、このイベントは「初日から多数の観客が押しかける大盛況」をみせ、さらに六本が追加上映されることになった。「入場時に混雑する場合がありますため、上映開始時間の一時間前に整理券を受け取るように」という注意が喚起されている。この回顧上映会はサンパウロに続いて、リオデジャネイロ、クリチバ、ポルト・アレグレ、マナウス、ブラジリア、レシフェを巡回することになっていた。この小津映画イベントに、河合が出かけたというのである。

先日来フンダッソン・ジャポン（国際交流基金）の肝煎りで映画監督小津安二郎の作品が引き続き上映されたいいが、筆者は「あとに述べるような理由」で、どうしても見る気がしなく、そっぽう（外方）を向いていたところ、女房や娘たちは頗る好評で、特にライオン、狸などところが中学時代の諸先生の仇名づくしが登場したりするらしいコメントを聞くうちに気が変つて、一夜近くのシネマテッカ（ラジキ・コウチンニョ街）の映画館に出掛けた。

出しものは「浮き草」と題するドサ廻りのしがたい劇団に生ずる内紛を語るもので、わが郷里に近い熊野灘の漁港尾鷲（おわせ）あたりのロケらしく、旅興行次の予定は新

宮であったり、不況のためわびしい劇団は解散に瀕して、新しいパトロンを桑名の町に見つけたりで、郷土訛りの会話が口をついで出てくるのである。

また、画面も演技もほのぼのと滲み出たヒューマニズムの感触を加えてうつつりとなる程見事なのである……。すっかりよい気分になって帰宅したら、建築料を出てパイザジズモ（著者注：庭園設計）を専門とする次女から「小津の芸術がパイ（著者注：父親）の七十年にわたる心の屈託を解きほぐした」と喜ばれた。

（「ごまめの歯ぎしり」、日伯毎日新聞 一九九〇年四月三日）

河合は小津作品にすっかり魅惑され、積年の恨みも一瞬にして晴らされたようである。「浮草」は小津が三重県内でロケをおこなった唯一の作品で、一九五九年八月一日から二八日まで志摩市大王町の波切を中心に撮影された。

* * *

武夫の長兄秀夫は一八九五年生まれ、東京帝国大学農学部に在学中、新人会に所属した。大学卒業後は帰郷し、農民組合運動と水平社運動に参加する。松阪は当時、労働者と農民、被差別部落民が共闘する《三角同盟》の拠点であった。秀夫は、日本農民組合三重県連合会と三重県水平社の合同機関紙「愛国新

聞」を一九二三年に創刊し、組織の活動を無産階級運動に導いてゆく。二五年神戸にあつた日農総本部の書記に就任、二八年第一回普選で労働農民党から三重県第二区の候補者となるが落選する。この間、二六年七月新潟の争議調査で検挙、二七年一〇月昭和天皇御大典予備検束で検挙される。ブラジルの武夫に送られた秀夫からの書簡の一部は、田中慎二氏（サンパウロ人文研理事）が保管している。一九二六年二月、二七年三月八日、一月二、二七日、一九三七年前期、一九四一年五月二三日、年不明一月一八日の合計七通である。秀夫は「蝸牛のような日本の中の狭いKobeに、警察の圧迫と戦つておる私を大声をあげて笑つてくれ。青春と健康を尊重せよ」（一九二七年一月二七日）と武夫に書き送つたこともあつた。

西川大二郎法政大学名誉教授が日本人農業移民の調査のためアマゾンアを旅行した際、武夫が同行した。西川がブラジル移住時の体験を聞いたところ、武夫はポツリと「気の毒でみていられなかつた」と洩らしたという。武夫の青春期のトラウマは、秀夫の社会運動だつたのではないか―「私を感じ取つていたあの心のやさしさと正義感、社会的関心の深さは当時からのものだつたような気がします」と西川は回想している。

「一途に思いつめる直情径行型」（田中慎二氏）の武夫は、太平洋戦争中、リオデジャネイロに來航していた日米交換船に乗り込もうとした。祖国の勝利を信じ、南洋開発事業に取り組もうという決意からであつた。戦後になつて「勝ち組負け組抗争」

がはじまると、敗戦を受け入れる認識派に加わつた。その結果、戦勝を信じて疑わぬ「勝ち組」から生命を狙われることになつたのである。

武夫は二〇〇五年九月一〇日、サンパウロ市ピニエイロス区の自宅で老衰のため九九歳で死去する。脇坂勝則氏（サンパウロ人文研顧問）は「非常に正義感の強い古武士然とした厳格な人だつた。箴言人を刺す」という感じだね」（「ニッケイ新聞」二〇〇五年九月二三日）というコメントを出した。

【注】

河合武夫に関しては、田中慎二「交換船での帰国ならず―書簡に見る河合武夫交遊録」（『人文研』第七号、二〇〇九年一〇月、サンパウロ人文科学研究所）を参考にした。

(1) 細川周平『シネマ屋、ブラジルを行く―日系移民の郷愁とアイデンティティ』（一九九九年二月、新潮社、九七頁）

(2) 根川幸男「近代における日本人キリスト者の越境ネットワーク形成―小林美登利の移動・遍歴を事例として」（『日本研究』第四六集二〇一二年九月）参照

「おにし やすみつ 本学教員」